

第2回高等学校改革プラン推進委員会（第三推進委員会）議事録

1 日時 平成17年6月27日（月）午前9時00分～午後0時00分

2 場所 伊那市生涯学習センター 501 研修室

3 出席委員

池上 昭雄委員長	熊谷 秀男委員
笠原 伸二副委員長	川島 一慶委員
小坂 樫男委員	丸茂 貴子委員
岡庭 一雄委員	関 哲夫委員
小林 辰興委員	北原 秀樹委員
小口 武男委員	藤本 功委員
北原 曜委員	

4 開会

（野村主幹教育支援主事）

みなさん、おはようございます。本日は、お忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

会が行なわれる前に、前回ご欠席でありました小坂委員、それから北原秀樹委員のほうから自己紹介をお願いしたいと思いますが、よろしくお願いいたします。

（小坂委員）

地元の伊那市長の小坂でございます。私は、市長会のほうからきました。総務文教委員という肩書きの中で委員を拝命いたしました。全県的な立場で考えてと、このように思っております。

なお、今回の問題について、市長会でも大変この問題については、関心を持っておりまして、過去に、吉江高校教育課長とお話をした経過がみられますけれども、一通り今日で終わるようですが、市長会としての態度を決めたいと思っています。

（北原秀樹委員）

前回、所用で欠席させていただきました箕輪中学校の北原秀樹と申します。

よろしくお願いいたします。

中学校代表ということで、中学校の考えや意見などをできるだけ反映できるように、私のほうでもやっていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

（野村主幹教育支援主事）

ありがとうございました。

なお、本日は、小池委員さんがご欠席でございます。

それでは、委員長さんお願いします。

(池上委員長)

あらためて、おはようございます。

第2回目でございます。説明がございますので、まず上着を本日は暑い日でございますので取っていただき、多分議論が熱くなってきますので。

それでは、前回の第1回にご質問がございました。それから、事務局から幾つか説明の資料が届いていますので、それから先にご報告をいただきたいと思います。それでは、ひとつよろしく願います。

(篠原教育幹)

おはようございます。

今日、初めてご出席された方がいらっしゃいますので、自己紹介させていただきます。高校教育課教育幹の篠原と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、私のほうから、前回5月29日の第1回の推進委員会、その後、教育委員会としてどのような推移が出されてきたのかということをご説明しながら、合わせて、すでに昨日、おとといと中信・東信と他地区で行われております。その辺の様子も含めて説明させていただきます。

すでに、5月29日の第1回の推進委員会に5月の定例教育委員会におきまして、学校数が提示をされました。また、同時に私ども事務局といたしましては、教育委員会のほうから、さらに具体的に検討できる資料をと求められまして、議事を進めていただくことになりました。

その間に、非常に多くの自治体や、あるいは関係団体等々から要望書が提出されるというような状況がございました。その辺を考慮に入れながら、推移を申し上げたいと思います。

6月14日に6月の定例教育委員会がございました。その折に、さらに具体的な資料をとという中で、校名等につきまして審議をしていただきました。ただ、6月14日の審議の中では、なかなか最終的な結論に至らないということで、その後、6月24日に臨時の教育委員会を持つわけでございます。

先ほど申し上げましたように、非常に多くの要望書が提出される、あるいは陳情が行われるという中で、しかも一番考えましたのは、こうした事務局報告によって、特に、推進委員の皆さんがさまざまなかたちで制約を受けてしまうということが一番恐れました。

従って、この推進委員会が、各地区におきまして、さらに具体的に話が進むようにということで、再編整備を考えていく上でのたたき台としての資料を準備しなければならないだろうというような結論の中で、6月24日の臨時の教育委員会におきまして、再編案を、公表するということになりまして、24日推進委員の皆さんのお手元にも別冊等で候補案、そして公表とこんな経過になっております。

いろいろ、この候補案をつくり、そして教育委員の皆さんのご審議をいただき、そして、公表するという上では、特に「魅力ある高校づくり」という点に関しまして、それぞれの学校が、それぞれこれまで努力をしながら「魅力づくり」を進めていく。そのように、ある意味では、再編整備を行うにあたって、具体的な校名を挙げながら考えていくということでは、当然つらい選択というものもあったわけでございますけれども、当初の基本的

な考え方、つまり、生徒たちに十全な教育環境を提供するという中で、さらに充実した高校生活を送れることを考えるというような部分を最も重視しながら、今回の公表に踏み切った、そんな経過でございます。

その後、各地区の推進委員会、今日、当地区は2回目ですが、2回目は、他の地区はすべて終了しております。ただ、第2の東信地区ですけれど、この第2回は6月19日ということで、まだ校名が示される前に開かれております。第2区では、委員さん方からは、19日当日に校名が示されるのではないかと考えていたというようなご意見もございました。

そういう中で、「魅力づくり」について審議をいただくわけですが、若干具体性に欠ける魅力、こういったものも挙がっております。

さらに続きまして、第1区、北信地区でございますけれど、これがおとといの6月25日に開かれました。新聞報道等で、すでにご存じの皆さんもいらっしゃると思いますが、時期から若干早かったのではないかと。それからさらに、こういった公表することとは、ある意味推進委員が検討することがなくなるのではというようなご意見もいただいたわけですが、しかし当会としては、これは、責任を持った教育委員会のほうの決に対しては、それを踏まえ、それから第1回推進委員会の中では、推進委員会が校名を決めるというのは難しいのだというようなご意見がある中での提示、これについては、一定の評価をするというようなスタートの議論がされました。

具体的には、「魅力づくり」、特に総合学科を中心とした魅力という点につきまして、各委員の皆さんから活発なご意見をいただきたいというような第1通学区の推進委員会の様子でございます。

それから、昨日につきましては、第4区中信地区の推進委員会がございました。中信地区におきましても、この開催冒頭で、やはり私どものほうから、今、私がこちらで申し上げているような内容で、推進委員会の委員さん方にお話をする中でスタートをいたしました。

そういう中で、具体的に議論を進めていく上で、教育委員会の報告に是としながら進めていこう。特にポイントになるのは、これは、教育の質、これを問う、そういう議論をしっかりとやっていこうと。

いかに切磋琢磨するか、そのためにどの程度の学校規模が必要なのかとか、それからさらに、仮に教育委員会の公表した候補案をたたき台というように考えるとすれば、これはもし対案を推進委員会の中で出すという場合には、十分に魅力づくりを考えた上で出していかなければならないと思います。

それで、第4区の場合もそうですけれど、この地域の小規模高校がございまして。この地域の小規模高校等が、小規模高校をいかにどういう手段で魅力を出して生徒を集めていくかといったようなことがございます。

そうした中で、結論的に4区を具体化しますと、いわゆる再編整備というものと、それから「魅力」とを並行的に扱いながら、提供されたものとしてではなく、並行的に扱いながら魅力を議論する中で、また再編整備を考えていく。

さらにまた、魅力を考えると。皆さん、そうした方向で議事を進めていくというようなところで審議を進めていくとそのように考えております。

いずれにしても、2区は、これから公表後の第1回目の委員会を開くのですけれど、

1区4区とも、第1、第4通学区でも、全県的なことをきちんと考えながらどのような形でうまく配置していくのが、よりベターな方法なのか。

そしてさらに、どういった新しい「魅力づくり」をつくりだしていくのか、そんなところで、今まで経過をしてきております。

以上でございます。

第3通学区の推進委員会におきまして、そういったところからフォローするのも、皆さん方に考えていただいて、そして、なおかつ総合的な考えていただければとそんなように考えております。以上でございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。

率直に申し上げまして、我々も第1回をやらせていただいたばかりでございますけれど、少し巷間言われている内容については、まだ本当は、本論のところではつかえているのではないかなという認識がありまして、これは第1回の時にご議論になったと思います。

まず、2点に絞られます。活性化された高校という問題と、それから避けて通れない財政問題です。これをどのように調整していい形に持ち込むかという世界だと思います。

まず第一に、その2点につきまして、できれば事務局から、しかる理由によりましてこういう審議になりましたという内容を、披瀝いただいて、その後、各委員の皆さんからその点について、「やはりそうだな」というコンセンサスをまず取っていきたいというように考えています。

少し議論がさかのぼりまして、「何をいまさら」と言われるか、それとも、「それはまだ終わっていない」というご意向があれば、それについて少しご発言いただきたいと思います。どうでしょうか。

(吉江高校教育課長)

高校教育課長の吉江でございます。

今、委員長さんからご提案いただいたもので、もしよろしければお答えする前に、本日は、かなりの量の資料を、実は、この推進委員会以外の推進委員会のほうから要望が出た資料も含めて、ご用意させていただきました。その中で、だいたい今のご都合といいますか、校名にかかわるものもございますので、よろしければまず資料説明をさせていただいて、その上で、お答えさせていただくような形でよろしいでしょうか。

それでは担当の野村主幹教育支援主事のほうからご説明させていただきますので、よろしくお願いいたします。

5 資料説明

高校教育課野村主幹教育支援主事より資料説明【説明内容省略】

(池上委員長)

はい。ありがとうございました。

(吉江高校教育課長)

今は、資料 15 までについてご説明申し上げました。

これで、冒頭、委員長さんからご質問いただいた内容に、若干ずれがあるかもしれませんが、お答えさせていただきたいと思っています。

まず、いわゆる活性化ということについては、ある意味、「魅力づくり」にも通じることがあるかと思っておりますが、今回、資料 9 にお示しいたしましたように、私どもは従来から県立高等学校の「魅力づくり」というようなことで、特色ある学科の設置とか、あるいは職業科における学科改編とか、あるいは裏にございますようなコース制の導入とかいうものを実施してまいった次第でございます。

しかしながら、例えば本日の資料に出てきます資料 14 ではございませんけれども、いかにせんピークを迎えた生徒数が、これだけ減少期に至っている中で、なかなかこれを下支えする形で全体的な学校の規模を維持するというものは、現実的には困難であるという現状でございます。

資料的にご覧いただきますと、『最終報告』をお持ちであれば、18 ページをご覧くださいければと思います。18 ページの下のグラフをご覧くださいますとお分かりのように、この折れ線グラフが平均のクラス数を表わしているわけなのですが、ピーク時は当然ながら生徒が多いときで、7.21 クラスというようなクラス数であったものが、このままいきますと一番下の折れ線グラフの状況になっておりまして、平成 31 年に最終的に 4.17 というようなクラス数になってしまう。非常に見にくくて申し訳ありません。この 4.17 ということを 89 校でなぞると、正直な話、1 学年 1 クラスという学校も多々できる。また、1 学年 2 クラスという学校も多々できた上で、こんな平均値になってしまうかと考えています。

そんなこともあり、また、ある程度以上の学校の規模がないと、どうしても生徒さん方が積極的にクラブ活動にかかわったり、あるいはいろいろな場面で、私どものほうでも選択制の授業等を十分にご提供できるというわけにはいかないという考えの中から、この折れ線グラフで見ていただきますと、今回の目安としての 76 校にした場合は、1 番上のグラフではなくて、2 番目の真ん中が黒く塗った部分になってくるかと考えております。

この形でいまましても、ご覧いただきますように、平成 31 年には 5 クラスを割りまして、4 クラスの段階に入ってしまいます。平成 30 年、平成 31 年というのは、またかなりの減少をきたしますが、私どもはもちろん、この計画自体を別に、1 期、2 期というような位置付けにしているわけではございません。しかしながら、今回このような形で、委員さん方のご議論の中で最終的に実施計画が策定できたといいたしましても、恐らく 10 数年後にはこういう事態になりますので、再度の見直しという事態も出てしまうかなと考えている次第でございます。

そんなことを考えますと、この時点において、ある程度の学校の規模にしないわけにはいかないのではないかと考えております。また、財政との問題というようなお話もちょうだいいたしました。財政について申し上げますと、県の歳入というのは、これは市町村の場合と同じであるわけなのですが、いわゆる県税収入というものがございます。それから国がいただいた税金を、結果的に還付するような形で出てまいります交付税というものもございます。さらには、国からの国庫補助金、国庫負担金というものもございます。それともう一つは、県がいろいろな公共事業等を行う場合において、起こすところの借金とよ

く言われているところの起債というものです、県債というようなものがありまして、大きくはこの4つに分かれるかと思っております。

それで、高校におけるいろいろな経費というようなものが、どのような形になっているかと申し上げますと、県の場合に、今申し上げた4つの中の税収と交付税というのは、いわゆる一般財源という言い方をされてありまして、それに対して、補助金とかあるいは起債というのは、起債の色分けは若干ありますが、特定財源のような言い方をしております。

それで、義務教育の場合で申し上げますと、義務教育の小学校・中学校の先生方にかかる経費につきましては、現時点におきましては、基本的に国から、負担金なり補助金というものがございます。また、建設等にかかわる経費についても、何らかの補助等があるというような状況でございます。原則的に、高等学校の場合には、補助金・負担金というようなものはほとんどございません。たまたま、先ほど申し上げました交付税の算定の基礎ということで、先生の数、あるいは生徒の数というようなものが積算の根拠として入っているということでございます。ですから言ってしまうと、先生の数や生徒の数が減ってくれば、当然算定の数字は減ってくるというような形になっております。

そのような中で、また、交付税というのは、先ほども申し上げましたように一般財源でございますので、それが来たものが、イコール全部このものだという色分けが、当然ながらあるわけではございません。そんなことの中でいきますと、多分県内の市町村さんも、本当にご苦労いただいているわけなのですが、現状におきまして、国の財政状況がよくないいということの中で、交付税の今後の伸びなどは、正直なところはなかなか期待できない現状かと考えている次第でございます。

ただその中でも、先ほど見ていただきましたように、基本的には、私どものほうの教育費の予算というのは、現時点においては、ある程度以上の水準は確保されている状況でございます。ひとつの判断としましては、これは、義務教育におきまして、30人規模学級の導入とかというようなものを入れたような背景もあり、そのような状況になっておりますが、なかなか現状におきまして、また、さらに申し上げますと県予算自体が、1兆円あった予算が、今、どんどん下回っております。そんな状況の中でございますので、大枠の議論とすれば、財政上はかなり厳しいものがあるというようなことは言わざるを得ないかと考える次第でございます。

以上でございます。

6 議事

(池上委員長)

ありがとうございました。

一通りご説明をちょうだいいたしましたので、これからは委員の皆さんのご意見を拝聴いたしたいと思います。

それでは、小坂市長さん、今の点について。特に「魅力づくり」というのはこれからの議論でしょうけれど、財政赤字の中、どういうご意向をお持ちか聞き取りいたしたいと思います。

(小坂委員)

伊那市長の小坂でございます。

今日、さっと今回の資料第4というように説明されましたが、私は、これは非常に大きなインパクトであり、また、議論が出される問題だというように思っています。なぜかと言えば、この会は、やっと2回ということで、第1回目が終わったばかりで、こうした高校の実名まで挙げて、いくらたたき台といっても、県民はたたき台とは見ていない。

すでに、もうそれぞれの発表された高校では動揺が起きておりますし、先ほどもあったように、この高校改革プランの目的は2つあったわけです。1つは、魅力ある高校づくりにはどうするかという問題と、それから、少子高齢化の中で、どういう形で再編をしていくかと、2つあったわけです。

どうもその1番目のほうはなおざりにして、単なる数合わせを一方的に発表された。ということで、私どもの市長会としても、やはりこれは納得ができない。いくらたたき台といっても、これをこの会に出されたということは、非常に遺憾である。

もし、県がこういった案を何がなんでもやるという決意であれば、これはもう、こういった審議会等は必要ない、やればいわけでございますが、少なくとも、県がこうした審議会へ出すからには、県の立場も分りますが、あちこちに署名活動などいろいろな運動が起きていますけれど、私は、それはそれで結構だろうと思っております。

もうひとつ、私は、県の今までの在り方がどうであったか。少なくとも、ピーク時が平成2年であったわけです。その時点で、少子高齢化は出ていたわけですから、ここへ来て、急にこの高校改革プランを来年の3月までにたたき上げるというようなことは、県の今までの姿勢、そして、短期間にたたき上げるということは、非常に無理があるのではないかと私には思っております。

それから最後に、上伊那農業高校の定時制の協力会というものがございまして、伊那市の市長の私が会長になっていて、定時制へ多少ですが援助をしております。そうした中で、前の市長会のときに、定時制がどうなるかということをお話を申し上げた時点では、定時制は今回の教育改革案の中に直接は入らないといった感じだと思ったのですが、ところが、先だっの協力会の関係の会議をやったときにも問題になりました。当然、影響を受けるのではないかという話があったわけです。例えば、この第3通学区の中で、幾つかの定時制があるわけですが、単なる中心である箕輪へ多部制高校を、定時制を統合するというのは、単に中心にあるというだけであって、本当に交通事情を考えた配置ではないと、私は思います。少なくとも、飯田から伊那まで、電車通学すると約2時間余かかるわけです。箕輪までだと恐らく2時間半ぐらいかかる。そうしたことが実際に可能であるかどうか。単に基本的な、中心にあるということからこうした箕輪へ多部制高校が入ってきて、定時制を配置する、統合するかということについては、ちょっと異議があります。私は、そう思っています。むしろ、やるなら下伊那へ1つ、あるいは、辰野あたりへ1つというのがいいのではないかと、私は思っております。

それから、もうひとつ、これは今後の問題ですけれども、権兵衛トンネルがことし開通します。すると、木曽から30分で結ばれるということでございますから、当然通勤圏になり、通学区にも相当な影響を与えるのではないかと、私は思っております。そういうことも、今後必要に応じて考えていく必要があるだろうと思っております。

今回の唐突な発表については、市長会としても、これは、もう少し議論をした上で発表すべきではなかったのかという感じでございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。

それでは、岡庭委員、よろしくお願いします。

(岡庭委員)

私は、今のお話を聞かせていただいたり、あるいは、県教委が進めてきた進め方、先日
の突如として学校名を公表したという中に見えてまして、非常に認識の違いがあるという
ように思っています。推進委員会に対する、やはり我々推進委員と、それから県教委の皆
さんとの認識の違いもありますし、推進委員の皆さんの中にも、この推進委員会に対する
認識の違いがこれほど大きくあるということを、非常に感じたわけでございます。

我々は、この推進委員会が出るときに、県の検討委員会が出した、葉養委員長が「はじ
めに」というところや、あるいは現在の学校教育の高校の現状について書いてあるわけ
ですが、あのように具体的に、今、長野県で起きている子どもの姿、学校の姿そのものを、
どういう形で将来につなげて、将来子どもたちが豊かに生きて行くという高校教育をつく
っていくのだというところで、推進委員会では議論がされなくてはならないのではないかと、
私は思っていたわけです。それを推進するのが推進委員会だと思っていたわけです。

どうも、県教委の考え方は、いわゆる学校再編、統廃合をいかに推進していくかという
ことを、この推進委員会に諮って意見を聞いていくということになりましたので、これは
どうも認識の違いがあまりにも激しいので、委員会そのものの存続について考えていかな
ければならないのではないかと。

それは、県の教育委員長が言いましたけれども、このまま放っておいたのでは、推進委
員の皆さんの議論がしにくくなる。それは、勝手な話なのです。我々の議論がしにくくな
るから、県教委は早く具体的な声を出してくださいよと言ったのなら、それはいいです。
我々は一言も言っていないのです。第1回のときも言いましたが、我々は、本当に子ど
もたちが豊かに暮すにはどうしたらいいかということを考えようではないかということ
を、かなり話をしたと思っているわけですが、ここのところが全然話にならない。

これは、私どもの長野県町村会から推薦を受けて出ておりまして、実は、長野県町村会
は、今日の午後2時から長野で県教委を招いて、高校再編についての懇談会をしようとし
ているわけです。

すべてのところで、いろいろな形で、高校再編についていろんな意見が出されたり陳情
が出される。そこで、私ども南信州広域連合飯田・下伊那では、わざわざ地教委も交えて
の懇談会をやる。そして、これに対してどう対応したらいいのかということをやろうでは
ないかと言っていた矢先に、高校名をぽんと出す。

今、小坂市長が言いましたように、これはもう独り歩きさせ過ぎたということだけです。
これを前提にして、「では皆さん意見はどうですか」と聞かれても、私は、なかなかそれ
に対して回答を持ち得ていないというように思っているわけです。ですから、推進委員会
がこの問題についてどのように判断するか、議論を判断するかということについては、私自

身も非常にとまどっているのが実態です。

例えば、新聞記事等の中に、市町村長で、実は保育園や学校の統合問題を具体的な議論で出すべきではないかという発言をした人もいます。確かに、吉江さんが今言ったように、財政の実態は、非常に苦しいところに来ています。特に、一般財源である地方交付税が毎年削減されてきているわけでありまして、そういう中で、義務教育の国庫負担金制度の問題、あるいは保育園については、負担金から一般財源化に対する問題等がありまして、それはもう財政的には、統合の問題などを考えなければいけないところにきていることは事実です。

そのときに、我々はどういうかたちでやるかという、魅力ある中学校や保育園をつくるために、統合問題を受け入れるしかないということは我々は言わない。財政が非常に苦しいという中で、どうしても学校を統合していただかないと、財政的にこのようなかたちで成り立っていかないのだからどうでしょうか、というかたちで、正々堂々と議論をやるわけです。

何と申しますか、「魅力ある高校づくり」ということを前面に抱えながら、実際は財政問題で学校を減らしていくという議論にすり替えていくとすれば、まさに木に竹をつぐような議論だと思うわけでして、この点を我々がどのように判断するか、私も結論を持ってません。委員としてこれから議論に参加させていただくかどうかということにつきましては、午後、町村会がございますから、そこで議論をさせていただくことになるだろうと思います。

しかし、1点、私がお願いしていききたいことは、これだけの問題が出てきたときに、第3通学区という形で、諏訪、伊那・上伊那、飯田・下伊那というものを全体で総合的に議論するということは無理だと思っております。

そういう点からいえば、旧通学区単位で、十分に、この地域の高等学校はどうあるべきか、地域の人たちが高等学校にどういう願いを掛けているのか。これは南信州広域連合の会議でやりましたけれど、確かに少子化がくることは事実明らかなので、高校再編という問題は、多分これはどうにも避けて通れない問題になるだろうけれども、その議論は、やはりその地域の人たちが、地域の子どもの将来や地域の未来がどうなったらいいかということを根底において、次の高校はどうあったらいいかということを議論されるべきであって、県教委のほうから、この学校をなくすからどうだろうかという形で議論されるべきでないということを確認しました。

そのことについてだけ、申し上げたいと思っています。

(池上委員長)

ありがとうございました。

今のお話の中で、最後のくだりでございますが、こういうことは、この中にあります部会のようなものを設けて地区で議論するというようにおっしゃっています。ありがとうございました。あと、財政問題は、遺憾ながら回避できないという認識でございますね。

はい。ありがとうございました。

では、笠原委員、お願いします。

(笠原副委員長)

率直なところ、この再編案を示すのは少し早かったかなという感じがしています。ここにご出席の委員の皆さんが、どういう考えでこの席に臨んでいるのかということを、もう少し理解し合う中で提示されるほうがよかったのかなとも思います。

「魅力づくり」というのは、それぞれの学校が必死になってやっているわけです。特に地域高校ですとか、定時制ですとか。そういった生徒数がどんどん少なくなってくる学校ほど、必死になって学校職員全員で取り組んで、「魅力づくり」を考えている。

しかし、いかんせん、生徒数の減少というものは、いくら「魅力づくり」をやっても、それに見合うだけの生徒がそれぞれの学校へ来るという状況にならないわけです。従って、そういう少子化による生徒数の減少と、あるいは先ほどご説明がありました県の財政というのを考えると、再編もやむを得ないのかとは思っております。

しかし、示された案が、果たしてそれが一番いい案であるとは、私は思いませんので、やはりこれから、いろいろな部門の検証もしながら、この第3通学区における主体性のある案を導き出すということが一番いいのではないかと。

その方法の1つとして、今のほうがおっしゃったような、各旧通学区の考え方というようなものも、我々は知りたいというようにも思いますので、そういうことを検討する小委員会のような機関ができれば、それが一番いいのかなというようにも思っています。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

ここで、ちょっと事務局のほうに書いてありますけれども、この部会の性質でございませうけれども、この内容をちょっとご説明いただけないでしょうか。

(吉江高校教育課長)

今、委員長さんからご質問いただきましたので、まずその点と、先ほど来、若干ご意見が出ておりますので、それも合わせてお話し申し上げます。

部会につきまして申し上げますと、実は、今までのそれぞれの委員会は、今の段階での設置については、基本的にはいかがかというような状況だということは、まずはお伝えしたいと思います。

それから、部会自体は、もちろん委員会で検討いただいた上で設置が可能だということにはなっておりますが、しかしながら、1点お願いしたい点があるとしますと、部会を設置する限りにおいては、部会で何を議論して、何を決めていただいて、何をこの推進委員会に報告として出してもらおうのかというようなことは、当然ながら決めていただいた上でないと、なかなか難しいのかという気はしております。

それと、それぞれ部会によりまして、仮に各通学区の部会を設置するということになりますと、今度はそれぞれ皆さまの考え方もあろうかと思っておりますので、その辺の受け持ちも合わせて斟酌いただきましてご検討いただければと思います。

先ほど、小坂市長さんのほうから、若干遅すぎたのではないかなというようなご指摘をちょうだいいたしました。これにつきましては、本当にご指摘いただいたとおりでござい

して、ある意味で、そういうような批判を、実際は、この報告書の中でもいただいております。また、お時間があれば、16 ページの後段のほうに記載されておりますのでご覧いただければと思います。

ただ、うちの県は、平成 10 年に「高校教育の改善充実について」というようなものをつくって、それをベースにある程度統廃合を検討した経過がございました。そのときのいわゆる適正な学校規模というのは、1 学年 6 学級でありながら、ただ 2 クラスになったら、あとは数年たったら分校にして、それから廃校にするというような案まで、その内容には出ております。

しかしながら、我々県のほうでも、具体的に募集定員の策定自体にいろいろ苦慮している問題の中から、また、その当時決めた内容というのが非常に緩い内容であったものですから、現在では 89 校のままというような状況でございます。また、お出ししたものについてのご意見がいろいろございました。これにつきましては、今後、私どもの篠原教育幹からもご説明申し上げましたように、最終的には、教育委員の皆さま方の判断の中で、また先ほど来、出ておりますが、5 月の教育委員会定例会以降の各地域や団体の皆さまの動きや要望などを踏まえ、さらには、ある意味で、推進委員の皆さまの中には、具体的に校名が出なければ議論ができないというようなご意見等々がございまして、その辺を踏まえての、あえて、早過ぎたのではないかというようなそしりを受け取るのは覚悟の上で、ご提案したということをご理解いただければと思っております。

ただ、この場であらためて申し上げたいのは、これはあくまでも検討材料でございます。先ほど笠原委員さんからもお話がございましたように、この案自体が、ある意味で最良の案ではなく、このような案のほうがいいというような議論は当然おありになるうかと思っております。ですから、そのような議論があれば、この案を手直しいたいて、その上での議論を重ねていただければと思っております。また、この第 3 通学区には、多部制・単位制をというお話も設けました。その中で、小坂市長さんのほうからも、通学が大変ではないかという議論も出ております。実は、従来からこの第 3 通学区からは、多部制・単位制をぜひ設置してほしいというような要望が出ておりました。しかしながら、設置する場合には、たまたま市長さんからのお話にございましたが、1 校と言わずに 2 校ぐらい欲しいとか、あるいはどこへ設置した場合、どこどこが通学が大変ではないかなどのご意見をいただいた経過がございます。

しかしながら、私どもは、当面は、多部制・単位制の独立校というようなものは、長野県としては初めての試みでございますので、まずは 1 校を設置いたしまして、それで定時制の関係で申し上げますと、先ほど通学の利便性がというお話がありましたけれども、ある程度以上、それぞれの地域が通学にあまり差し障りがないように、それぞれの既設の学校のことを配慮しながら検討した案でございます。ですから、ぜひ、その辺も含めて、ぜひご議論をいただきまして、それぞれのものについて深めていただければと考えている次第でございます。

よろしくお願いいたします。

(池上委員長)

ありがとうございました。

それでは、小林委員、よろしくお願いします。

(小林委員)

実を言いますと、私も、最初から「この会議は何を目的にしているのかな」ということを危惧(きぐ)していまして、それが現実になってしまったわけです。

しかし、私は、このように考えております。ここへきた以上、堂々巡りをしていても進展がないわけであります。ところで、ここの推進委員会は、高校改革推進委員という名前だけれど、実際にやっていることは、高校再編推進委員会だと思います。

しかし、それだと、先ほどのような数合わせの問題になって、結局はどの学校を減らすかということになってしまうということでありましたら、やはり、再編であっても、検討委員会で出ているいろいろな課題をクリアするという視点がないと、いろいろと混乱してくるのではないかとということで、全く私個人の意見ですが、これから進めていくときに、今回県から出した高校名は凍結して、その前に我々は、もっと再編のための視点についてたくさん議論しなければいけないと思います。

従って、どういうことかといったら、私が考えたのは、6つの視点をもって、それについて、今後多くの議論を展開していってもらえると少し前進するかなということですので、私の勝手な考えで申し訳ありませんが、私の考えたこの問題を推進していくときの視点は、次の6点であります。これは、恐らく県教委も、本来底流にはそういうものをある程度持っているのかなということを感じながらということも含んでおります。

1つは、再編の中で、完全廃校は極力避ける努力をする。

2つ目は、結局、今後、小規模校を統廃合していくことはやむを得ない面もあるけれども、地域振興の担い手である将来の青少年がなくなってしまうというのは、地域にとって大変大きな課題だと思いますので、多くの子どもの通学圏を奪うような統廃合はしない。でも、小規模校を対象にはせざるを得ない。

3つ目、先ほどから出ている「魅力ある学校づくり」。私が知っている限りでは、本当に努力している学校と、やっているのだけれど、あまり本気になっていないなという学校があると感じます。かなり前から、本当に頑張っている学校や、いろいろ問題が出てきたので、ここへきてようやく始めた学校もあると思います。私は、3つ目は、本当に「魅力ある学校づくり」を、何年とは言いませんが、数年前から努力して、地域から評価されている学校は、規模の大小を問わず再編の対象にしない。これは、絶対に大事なことだと思います。これは企業でも、結局は本当に頑張っているところをつぶすという企業はないと思うんです。

4つ目は、私は、今回一番考えて欲しかったのは、普通科です。普通科というものは、非常に無目的で、入ってくる生徒が、職業科よりも非常に多いわけです。普通科の再編を、特に、都市部に似たような学校が数校あるところが幾つかあります。これこそ再編をすべきではないか。

5つ目は、総合学科はいいのですけれども、他県を見ると、進学高校にしていく傾向が非常に強いかと思います。そうではなくて、長野県独自の総合学科を、ジョイントだとか、

いわゆる複数校提携というか、ここにあるどの資料が分りませんけれども、そういう形をできるだけ採用していくと同時に、職業科を本当に魅力のあるものにしていく。職業科の内部のことになると、ここで議論はできないかと思いますので、結局総合学科をどうするかということが主になると思います。

最後に6番目ですが、単位制・多部制は確かに大事だと私も思います。しかし、これはどうしても少人数学級でやらなければ運営は無理だと思います。どうしても小規模校にならざるを得ない。となると、それは、単位制・多部制の学校をつくる場合には、今まである学科と併設してやる。単独というのは無理だなと思いました。

その6つなどを視点にして、「いや、それは間違いだ。このようにしたほうがいい」というようにしていってくれと、もう少し議論がかみ合うかなと思います。最後に付け加えて言いますと、やはり下伊那・上伊那・諏訪は、他地区と状況が全然違うと思いますので、やはり地域のバランスを考えて、どうしても統合するなら、1地域1ということは配慮する必要がありますかなと思います。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

示唆に富んだお話を幾つかちょうだいしましたが、そういたしましても、財政的な側面から見ると、やはりこういう統廃合ということが、「統」はいいとしても、「廃」というのは発言してはいけません、みんな。行く方向は間違いないということで認識してよろしいですか。

では、その他について、また「魅力ある学校」という側面に対応させていただきます。

では、小口委員、恐れ入ります。

(小口委員)

それでは、私は、経営者協会のほうからまいりました小口と申しますけれども、話を少しさせていただきます。

以前の何人かの方々が、財政面ではもう仕方がないのだという話をされておりましたので、これについては、特に話すことはないと思いますけれども、やはり今後、国債ですとか、将来の子どもたちの負担ということを考えると、いち早くこういうことを改善していくという必要はあろうと思います。

そのためには、確かに、ジョイント校とか、完全な廃校はなくすという話もありますけれども、ジョイント校の場合には、費用的にはなかなか削減が難しい。あるいは、完全廃校をしないと、費用的に効果が少ないという観点がありますので、私は、ある程度しっかりした指針をこの中で決めていく必要はあろうかと思います。

そのような意味におきましては、今回のたたき台は、私は、非常に評価をしております、とにかく、こういう会は、やはり多面的に見るという必要はあろうかと思います。そのために私どもはいるのですけれども、多面的に見る場合に、私どもは全体的に見ることができないのです。全体はどうなっているのかというバランス感覚のようなものはありませんので、もちろんその辺は、よく教えていただく必要はあろうかと思いますけれども、

そういうたたき台をつくっていただく中で、ああ、そうかと、こういうところこういうところは、こういうバランスの情報の中で、こういう話が出ているのかということが理解できれば、たたき台は非常にありがたいことだというように思っております。

また、私どもに、どの学校をやめてどこを残すのだと言われましても、なかなかそういうことが言えない、分らないということがありますので、そういう意味においても、こういうことは非常にありがたかったなと思うわけです。それから、「魅力」についての部分は、しっかりと練っていく必要があるかと思ひまして、とにかく、それぞれの委員さんのほうから話が出ておりますけれども、私どもはこういう部分につきましては、もっとこういうところが足りないのではないかというような意見を持っております。例えば、子どもの社会性というのを考えると、子どもが生まれて家庭で育って、幼稚園・保育園に行って、小学校・中学校と、こういうだんだんに成長する過程の中で、子どもの持っているコミュニティというものがだんだん大きくなってきて、その中から社会性が生まれて、それで社会に飛び出す。こういうようなバランスが、どうも今の世の中で崩れている。

あるいは、学力問題も非常に問題になりますけれども、先日、中教審の副会長さんから統計的にいろいろな話を聞く中で、日本の学力は、小中学校の学力ですけれども、世界的に見ると確かに順位は下がっているけれども、第1グループという点ではあまり問題がないという話があります。ただ、問題なのは、勉強を好きになる子どもが減っている。ほかの国に対して、非常に劣っているということが問題になりまして、やはり、勉強を好きにするためには、どういう環境がいいのか。こういう「魅力ある」という高校をつくって、それから大学なり社会に導いてやる。

こういうことを我々が考えてあげる必要があるというように思ひまして、そういう意味においても、それは財政面ではどうしても早く改革する必要がある。それと合わせて「魅力ある学校」をやらないと、ただ単に財政面で形だけを整えても、そういう魅力ある高校にするチャンスを失ってしまうという気がしています。ですから、ある程度の目標期限をもちながら、どのように方向付けていくかというのは、大変大事なことのようには考えております。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

今のお話の中で、少し伺いたいのですが、我々に託された時間というのは、確かにほとんどないに等しいわけですが、それでも、全体の流れからすれば、そういう結論を出さざるを得ないかもしれない。

そうすれば、議論の時間というより、質になるかもしれませんが、何と云っても、時間がなければどうにもならないというのでしょうか、おおむね、伺った範囲では、月に1回くらいの議論というように伺ってありましたが、いかがでございますかね。これは、月に2回やるとか3回やるとか、12回やるとかということについては、どんなご見解をお持ちでしょうか。

(野村主幹教育支援主事)

すみません。ちょっとよろしいですか。

事務局でありますけれども、月2回ということだけ委員にお願いしていることになりませんが、5月、6月あたりは、種々ありまして1回ということもございましたけれども、2回ということで各地区ともお願いしているということです。

(池上委員長)

ああ、そうですか。では、間違えました。恐縮です。

では、その点について。

(小口委員)

やはり財政面で、どうも以前の数名の方の考えでは、だいたいの方向付けができていますように思うのですが、その辺の中で、ある程度を決める中で、どのくらいの時間が必要なんだというような考え方をしていっていかれるのでしょうか。

やはり、多くいるのであれば、多く検討する必要があると思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。

それでは、北原委員から。お世話になります。

(北原曜委員)

私の基本的な考え方をお伝えします。

今回の県教委から出されてきた案を、私は評価したいと思います。こういういろいろな意見が錯綜(さくそう)する中で、あえて具体的に出されたことは、大変評価したいと思います。

ただ、やはり、少子高齢化というものが分っていながら、なぜこの期に及んでということなのですが、待ったなしの状況であるにもかかわらず、少し遅すぎたなという気はしています。

それから、この推進委員会の在り方についても、先ほどお話がありましたけれども、入口のそもそも論で始まっているところが、前回も今回も結構ありますけれども、もともとこの推進委員会というものは、利益代表ではなくて、もっと上から見た立場でお話していただきたいなという気はしています。

再編についても、いつまでとか、議論はどこまでしたらいいのかということがございます。ただ、これはもう時間的にも、かなり切羽詰まった状況ですので、質の高い議論をしていきたいなと思っております。

そのためには、その「魅力ある」という言葉が、誰にとって何のための「魅力ある」という言葉なのかということ、よく吟味してやっていかなければいけないなと感じております。そう言いますのは、現在、学習意欲を失った生徒、それから、生活意欲を失った生徒が、ものすごい数いるわけです。それは、普通科、工業科、農業科を問わず、かなり広範な生徒にはびこっている状況です。そういう子どもたちは、少子高齢化でありながら、

はっきりいったら資源の無駄です。そういうような状況が生じてしまっているわけです。その改善のためには、素早い改革をしていかなければいけないのではないかなと、私は思っています。

それで、この推進委員会では、その「魅力ある」という言葉をもっと掘り下げて、『最終報告』も少し分析が足りないかなという気もしているのですけれども、さらにもっと掘り下げて、魅力ある高校の改善を考えていかなければいけないと思っております。

また、具体的な話は、後でお話ししていきたいと思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。

ここで、今ご指摘のありました「魅力ある」ということでございますが、教育委員会の方で、特にご発言があればお願いいたします。

(吉江高校教育課長)

今までも、先ほど少しご説明申し上げましたように、「魅力づくり」というようなことから、いろいろなカリキュラムを設定したりというようなことはやってまいりました。ここにきて、改めて「魅力」というような言葉を使いましたのは、要は、生徒が楽しく学校へ来られる学校といえますが、当然ながら、生徒さんのモチベーションが上らないことには、生徒の活気が学校に出ない。活気が出ない学校は、以前、ほかの委員会でも出たひとつの例としてあったのですが、やはり本当に、「学校へ行って生徒が元気な学校というのは、出てくる生徒さんもいい生徒さんが多い」というようなことをおっしゃった方がいらっしゃったのですが、まさしくそうだと思っております。そういう意味で、生徒さんがどういう学校だったら行きたいなと思えるようなということで、ある意味、例えばその例としまして、コース制などというものもありますが、そういうようなものを、どんなものを設定していったらいいのかといったことも、合わせて考えていただければと思います。

若干、総合学科についての議論はいろいろあるかと思いますが、長野県の例で申し上げますと、ひとつですが、塩尻志学館高校が、いわゆる塩尻高校から転換した平成12年度以降には、生徒さんの要望というのは非常に大きいものがございました。また、生徒さん自体も、ややもしますと無目的な方が入られた場合、意欲のない生徒さんの場合には、単位を選択するにあたりまして、少し問題があるかなというようなお話も、問題点としては指摘されておりますが、多くの方々は、自分の目的を持って、いろいろな単位を取得して、その上で勉学に励んでいただいております。非常に活気があるというような話も出ております。

こんなことも含めまして、ぜひご議論いただければと考えている次第でございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。

(北原曜委員)

今の点なんですけれども、この「魅力ある」というのは、先ほどおっしゃいましたけれど、生徒にとって、楽しく通えるということだけではないと思うのです。その生徒に迎合するのではなくて、生徒の将来的な能力をうまく開花させてあげるという視点が大事だと思うのです。そういう意味で、生徒のニーズが高いということと、それから、社会的ニーズが高いというのも、ひとつの「魅力ある」ということだと思うのです。

その2つのバランスを考えて、本当の意味の「魅力ある」という高校を考えていかなくてはいけないなと思っています。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

(篠原教育幹)

よろしいでしょうか。

ただ今の魅力ということについて、北原委員さんの方から、お話をちょうだいしました。

今回のいわゆる各4通学区の「魅力づくり」の役割ということが問われる、今のお話だったと思います。

つまり、先ほどの資料にもありましたように、これまでいろいろな形で、ある意味では学校の主体性をもって、あるいは、県教委の教育行政の計画をもって、例えば、理数科をつくり、英語科をつくり、国際教育科をつくり、あるいは各学校においては、個性をさまざまにつくる。それから、特に職業科においては、これは、そのときの時代のニーズに合わせて学科名を変える。そして、学科名を変えることによって、教科の内容も時代に沿ったものに変えていくというような努力をしてまいったわけです。

高校改革の魅力というのは、総合学科と、多部制・単位制という2つのものが、具体的には、かなり現実的な形で『最終報告』にもあります。それから、これから進めていく議論の中にも盛っていただきたいということで、24日に「候補案」という形で、教育委員会がお示ししたということになります。つまりハード面で大きな特色をつくった。その中で、それでは、さらに各学校単位で、あるいは各地域単位で、それぞれどのような特色が多々できるのかという議論になっていくのだろうなというように思っております。

それからもうひとつ、地域という考え方ですけれども、やはり、こういう交通網が発達した時代を考えますと、4地区で行われている。この4つの地域と、あるいはもっと言えば、長野県という、日本の中のひとつの地域というようなことの中で、先ほどからのいわゆるピンポイントではないと、「全体を見ながら、長野県がどうあるべきか」ということを考えるべきだというお話もありました。

そのように、大所高所から長野県の生徒、あるいは高校生、あるいは南信であれば南信の高校生をどのように育てるかといった視点でお話をいただけると、私どもとしても非常にありがたいと思っております。

高校は、生徒たちの思いを、当然実現するところではありますけれども、しかしそれは、私どもがしっかり準備をして、そして、ある意味で生徒たちにとっては、高校1年生の8

タート地点では、心理的には若干つらいこともあるかもしれませんが、しかし、最終的な目標というものが実現されたときに、生徒たちにいかに満足感を与えられるかということや、それを「魅力」という名前のもとで、バランスよくそうした高校ができていけばというように考えているところであります。

（池上委員長）

ありがとうございました。

その「魅力」というところに、さらに議論を深めていきたいと思います。

そこで、いわゆる財政問題について、どんなご見解をお持ちか、少しご発言いただきたいと思います。

（北原曜委員）

財政問題と少子化の問題です。これは、もう切っても切れないといいますが、もう認めざるを得ないということで、県のほうでこういう高等学校改革プランを、推進委員会をつくったり、案を出したり、それぞれやむを得ないことだなと感じております。

（池上委員長）

ありがとうございました。

議論が随分出てまいりましたけれど、ここで少し小休止をさせていただいて、それから後半にいききたいと思います。

【休憩後再開】

（池上委員長）

それでは時間がまいりましたので、再開をいたします。

続いて熊谷委員、ご発言をお願いいたします。

（熊谷委員）

最初に、校名の出た案ということで発表されたについて、一言お話ししたいと思います。が、実は、私も下伊那農業高校の学校評議委員をやっているわけですが、こういった検討委員会での検討が進んでいるということを、県民の一人として、それほど熟知していなかったという率直な感想でございまして、ここへきて、ある意味でいうと、関係の皆さんは、相当議論をされていたかもしれませんが、県民の間では、高校の在り方をどうするんだという議論が始まったときからあったように思っていたわけでございます。

飯田でも、実は、この7月11日に、公民館主催の高校についてを考えるシンポジウムをやろうというような動きも出てきておりまして、高校をどうするんだ、大変なんだという、いろいろな意味で、議論が始まったことをよかったなと思っているわけです。

こういった案が出たことによって、議論が少し影響されるというのは非常に残念だという気がしているところでございまして、本当に、やはり長野県における高校を「おまえはどうするか」という議論が、県民的な議論になるのを待ってからでよかったのではないかと

というように思っているところであります。

そういった前提で、2つほどお願いしたいわけでございます。1点は、先ほど岡庭さんからも出ていましたが、部会の設置の件でございます。吉江課長からは、難しいというようなお話でしたが、当初から、要綱にも部会を設置するということは出ているわけでございますし、県教委のほうの案にも、第3通学区については、広い通学区であり、地区により非常に状況が違ふということは、はっきり明記しているわけでございます。

また、正直に言いまして、その案が示されたことによって、議論が非常に具体的になってきましたが、諏訪地区では、変化がないのだからいいではないかというようになってしまふわけなので、どうしても、第3通学区はどうするんだという議論をやったら、14人の委員中6人が諏訪の関係者の方でございますから、なかなか、第3通学区としてはどうかという議論が深まらないというのはそういうようなところなのです。

先ほど、出した当初から、「魅力ある高校」について議論するというところでございましたが、だったらあえて4つに分ける必要もないわけなので、4つに分けたものを12に分けるということができないようになるのだという点で、ぜひその辺については、部会を設置して、もう一度地域における高校教育なり、高校がどうなるのだということについて、議論が深まることが期待したいと思っています。ぜひこれは規約にあることでありますから、設置していただきたいというように要請するものであります。

もう1点であります。この案につきまして、たたき台だというように、盛んに言われているわけですが、先ほどからも、吉江課長も、最良のものではないというように言っています。ではこれを、最良のものではないと言うならば、修正するなり、変更するという点について、誰がどのような方法でやるのかについて、はっきりさせてもらいたというように思うわけであり。この推進委員会そのものが、修正するなりなんなりという議論をしっかりできるものかどうか、誰がどのような方法でやるのかということについて、具体的にご提示いただければと思っております。

以上であります。

(池上委員長)

ありがとうございました。

部会の設置については、議論がずっと終了した後、またご発言いただきたいと思います。

今の、案の変更についての認識でございますが、これを、よろしくお願いします。

(吉江高校教育課長)

ちょっと一点だけ申し上げたいのですが、非常にデリケートな表現なので、あえて申し上げますと、私は、この案がすべてではないという意味合いで申し上げたのでありまして、それが最良のものでないというようにとらえ方は、もしそういうことであれば、それはご訂正いただきたいと思います。

先ほど申し上げましたように、あくまでも検討材料です。検討材料であれば、当然ながらそれをお示ししましたので、その内容について、委員さん方からのご意見の中で、当然変更はあり得るというように意味合いでお考えいただきたいと思います。

また、基本的には、それぞれ4つの推進委員会を立ち上げておりますので、その4つの

推進委員会のこの場で出された、こことこことというような案ではあるものの、いや、違う、こっちとこっちではないかとか、あるいは例えばの話で、こことここで、考えられているのが、逆に、もっと全然違うところがいいのではないかなど、そのようなご議論を、委員さん方の意見が煮詰まるのであれば、この場でぜひしていただきたいという趣旨です。

そういう意味では、最終的には、その報告をいただいて、最終的に実施計画ということでは、県教育委員会が意思決定はいたしますけれども、そういうようなことで検討をお願いしている立場でございますので、ぜひその辺のことも深めていただきたいということをお願いいたします。

（池上委員長）

ありがとうございました。

それでは川島委員、恐れ入ります。

（川島委員）

まず、先ほどから出ておりますが、一点、このたたき台というものを出された時期につきましては、やはり早いような感を抱いております。もう少し、地域の議論も、もちろん、現状維持的なご意見、成果とか思いますが、そういう地域の意見を出された後で、この推進委員会で確定的な校名等を出せないというような状況に、ある程度なった段階で出れば理解できますが、今この段階でというのは、かなり早かったかなという認識を持っております。

正直に申し上げて、この委員会で具体的な校名を出すということは困難だと思いますので、いずれは出していただかなければならなかったのかなということは感じております。それから、少子化、財政問題ということが、当然前提にありますので、ある程度の高校数削減というようなものは、やむを得ないのではないかなという感覚でおります。

一応、保護者の代表という形ですので、やはり保護者なり、これからの受験生といった立場でのものの見方をさせていただきたいなとは考えております。正直に申し上げて、受験する偏差値的なものは、やはり避けて通れないものであると思うのですが、ある程度の進学校的なものが需要として存在するのは仕方ないと思うのですが、2 番手クラスになったときに、受験生の子どもたちが、「魅力ある高校づくり」というその魅力というところだと思うのですが、その偏差値というのにとらわれて、輪切りで「おれはこの高校しか行けない」といった選択ではなくて、少し言葉はきついです、進学校は無理でも、他の高校であればどこの高校に行きたいなという選択ができるという形で「魅力づくり」をしていただいている中で、昨年であれば、ある程度、保護者なり子どもたちも納得して、その選択の幅が狭まるということについても、ある程度の納得が得られるのかなというような感覚ではあります。

雑ぱくですが、以上であります。

(池上委員長)

ありがとうございました。

熊谷委員、ちょっと落としましたけど、その財政問題をどのように考えているか、そのところを少し教えてください。

(熊谷委員)

財政問題については、当然、行政にかかわる共通課題としていることだという認識は持っています。

(池上委員長)

ありがとうございました。

それでは、丸茂委員、恐れ入りますがお願いいたします。

(丸茂委員)

丸茂です。よろしくお願いします。

私は、高校の保護者代表ということでまいりました。今、高校に子どもを通わせている親というのは、高校改革プランに関して危機感を持っていないと感じています。私は中学生の子どももおりますので、中学校の保護者たちに話を聞いてみますと、この「高校再編」という部分が独り歩きをしているように感じます。ここの学校はつぶれるのではないかという危機感を持ちつつ、今、川島委員がおっしゃいましたように、やはり偏差値的な問題で、選択の余地がない進学をさせなくてはならない親にとっては大変深刻です。

今回、諏訪地区は再編がないので、一安心というように感じている親がいることも事実です。しかしながら、「魅力ある高校づくり」ということに関しましては、諏訪地区においても該当するわけですから、「高校再編」をきっかけにして、この「高校改革プラン」という問題が大きく世間に広まってきていると思います。諏訪においては、小規模校がそれぞれの改革にむけて活発な動きを始めています。「高校改革」という言葉がきっかけとなったようにも感じますが、ここで、いきなりこの高校名を挙げてということは、かなり乱暴なやり方ではなかったのかなと、私自身は怒りを覚えております。時期が早かったということで、私も、皆さまと同じ意見です。

それから、高校改革プランというのは、まだ最後まできちんと理解できておりませんが、子どものニーズに応えた、あるいは応えるような学校をつくりたいというのは如何なものでしょうか。今、履き違えられたゆとり教育で学力がかなり低下しているような状態の子どもたちが、「これを必要としている、こんな学校に行きたい」などということは、考えられないと思っております。義務教育の段階で、14歳、15歳の子どもが、「このような学校」というように、自分たちが学校をつくっていいこうなどということは、まず考えられないと思っています。

それから、プランの最終報告の中のアンケートについてでございますが、県民2,000人を対象にということで、郵送で回答を得たという内容を見ましたけれど、県教委の方々に、この回答を真に受けてもらっても困るなというような結果であると、私は感じています。

高校というところは、そもそも自らの意志で進学して勉強をするところです。ですから、

子どもがこういうように言ったからこういう学校をつくったぞとではなくて、まず私たち大人が、有識者が、教育委員会が、県が、こういう学校をつくる。それに対して子どもたちが「行きたい」と来るのが普通ではないでしょうか。そのような意味で、まずちょっと「魅力ある」ということを、先ほどどなたかがおっしゃいました「子どもにこびてどうするのだ」と私も思いました。ですので、まずこの「魅力ある高校づくり」という部分から話を進めていきたいと私自身は思っております。

それから本当に県は、県知事は、学校を統廃合する気持ちがあるのだろうか。「本気なの？」と県教委の方々にではなく、知事ご本人にお聞きしたいという気持ちはあります。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。先ほどのアンケートの結果についてでございますが、確かにアンケートというものは、出題の方向によって結論のほうもずれたりするのが、まああるわけでございますが、今の申し出について、教育委員会のほうからご回答をいただければありがたいなと思います。

(野村主幹教育支援主事)

最終報告 2 ページの下の方になるアンケートのことかと思えます。2 ページから 3 ページに続いてでありますけれども、アンケートを採るからには、それをやはり大切にして考えていかなければいけないなと思います。おっしゃるようなこともあるかも知れませんが、大切に考えていかなければいけないと思っております。

(吉江高校教育課長)

今、丸茂委員さんからいろいろご指摘をちょうだいしまして、私は大変頭の痛い内容であらうかと思っております。それはただ、ひとつには、やはり今生徒さんの目的意識が非常に薄れているという、確かにご指摘どおりで、中学生もそうであると同時に、なかなか高校生も目的意識を十分持たないでいて、結果的にある高校に進学して、それがあらためてよかったのかどうかというようなことを、思い返してしまうような事例があるというようなことが現実的でございます。それで中には、1 年生から 2 年生に上がるときに、結果的には意に合わないということで転校されてしまうというようなケースもあります。

例えば私どもは、そのようなことに対する考え方としますと、現在、ひとつの学校に幾つかの科が設けられているところがございます。普通科以外の商業科とかあるいは機械科とか、そのようなところが設けられているところがありますが、そのようなところにつきましては、例えば何々科から次の科に転科が可能なような形の学校も、当然ながら設けていきたいということは考えていきたいと思っております。

また、ある意味、総合学科、先ほどから出ておりますが、この総合学科自体も、入ってからのご自分の将来についての意欲を、改めて認識いただけるというようなことの中から、ひとつの大きな学科設定をされているわけですから、そのようなことを広げることによりまして、非常にご自分の将来を見据えた生徒さんが、今後できてるのではないかと思っております。

また、ある意味、「子どもにこびてどうするんだ」というご指摘もいただきました。これは先ほどもちょうどいい次第でございますけれど、反面、公立学校に対してのひとつの批判として、この高等学校に限らず小中高そうなのですが、当然来られるという生徒さんがいるということから、来る人がいるから、改革その他については安閑としてい過ぎたのではないかなというようなご批判も、中央審議会でもいただいているのも事実でございます。

そのようなことを考えますと、やはりこのような機会に、それぞれの皆さま方から今ちょうどいいようなご意見を含めまして、今ある県立高校、さらには、たまたまこの場で校名が挙がらなかった高校も含めて、どうしていくかということをぜひ、ご論議いただきたいと思います。それがイコール魅力ある高校づくりかと考えている次第でございますので、よろしくお願いいたします。

（池上委員長）

ありがとうございました。最後段の話で、知事が本気だから我々を集めたのだでしょうと、私は思っていますが、その点は確認させていただいてよろしいですね。

（吉江高校教育課長）

基本的には、私どものほうの考えに知事も、基本的なお考えは一致するところがあると感じている次第でございます。

（池上委員長）

ありがとうございました。それでは関さんです。

（関 委員）

関でございます。

最初に財政上の問題ですけれども、これは資料の13あるいは12のほうに示されておりますとおり、やむを得ない問題であると思います。ここまでなってしまうと、もう高校の再編、統廃合も含めてやむを得ないというように思っております。しかもこのグラフを見ればもう、待ったなしの状態にあるというように思います。高等学校への魅力ある高校づくりということに向けては、県教育委員会の指導を受けながら、各校で今、努力しているところでございます。しかし、学校の活力というか、あるいは十分な学力をつける、そういった意味では、ある程度の学校の規模が必要でございまして、そういう意味でも、この少子化の問題からは各校の再編はやむを得ない、しなければならないというように思っております。

このたび教育委員会から、高校名を含めた提案が提出されましたけれども、やはり私も推進委員の中から、再編に向けて具体的な校名を出すということは非常に難しいことから、提案として校名を出していただいたことは、私は評価したいというように思っております。

前回も申し上げましたけれども、今までの流れの中で、改革プラン検討委員会が約1年半、それから懇話会で、若干の差はありますが半年。そしてまたこの推進委員会で、実質的には少ないですけどまあ約1年。足掛け3年にわたる議論があれば、私は決してこの期

間が短いとは思いません。短いというなら、ではあと何年やればいいのか。3年という期間は、私は、それはまあひとつの結論を出せる期間ではないかというように思っております。

それから部会についてですが、「できる規定」であるんですが、先ほどからも話題になっておりますが、やはり部会をつくる上では、この推進委員会で、メンバーとかあるいは何をどのように部会で決めるかとかいうことを、私どもが責任を持って、部会に提示していかなければならないということで、また非常に時間が掛かかります。待ったなしの改革を求められている上では、私は部会をここでつくことは、いかななものかというように思います。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。部会の件については、先ほど申したとおりなのです。

では、北原委員、お願いします。

(北原秀樹委員)

北原です。中学校のほうを代表してやってまいりました。

中学校のほうでは、この問題についてそんなに大きく話題になっているとは言えません。関係する職員のほうはやはり気になっているようですが、多くの職員の場合、私のいる中学校ではそんなに話題になっているというわけでもないと思います。新聞にこのように公表されましたので「ああ、そういうふうになっちゃうんだな」というような意識を持っている人も、結構いるような感じを受けています。

統廃合につきましては、やはり人数の関係、財政の面からも仕方ないなという意識は持っていますが、どのような統廃合なのかということについてはやはり興味があるし、特に私は上伊那ですので、2つの高校がということが新聞に出ています。箕輪工業についても、お隣の学校ですのでかなり神経質になっているのもあります。先ほどの話から、これはたき台ということで決定ということではないということですので、本当にそうか分からないと思いますが、新聞にもう出てしまいましたので、ほんとにこうなっていくのではないかと、そういう危惧(きぐ)は持っております。

しかしここで話をして、私が何か言ったからといって変わるかどうかは知りませんが、できればここ地元というのは大事にしたい意見は多々ありますので、その辺はまた、いろいろな方の意見を聞いて、私が代表してまた言っていきたいと思います。

それから、この改革推進委員というのは何をすればいいのかというのが先ほどから出ていますが、やはりこれは遅すぎているのではないかなと思います。ここにきて急にばたばた始まっている。3年になればもういいんじゃないかという話もありますが、私らにとってはやはりまだ本当に新しい感じがしますので、もうこの先が見えていることですので、これについてはどのように考えていったらいいかなと思います。

それから魅力についてですが、これは中学校の立場から言わせてもらいますと、中学校のほうでもやはり生徒をひきつける授業だとか、そのようなものをやはり考えていかなければいけないと思います。高校だけではないと思うんです。総合学習や選択や少人数とか

いろいろなことをやっているんですが、中学校というのはどこに行っても大して変わりありません。やはり高校を魅力あるものにする場合には、中学もぱりっと魅力あるものを考えていかないと、やはり不登校だとか学校になかなか来られないという子も結構いますので、その点も含めて、高校だけではなく中高一貫教育とかそのようなものもありますが、その辺を含めて、やはり中学校のことも考えていただけるといいかなというように思います。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

それでは、藤本委員、お願いします。

(藤本委員)

藤本です。よろしくお願いいたします。

今まで長野県の教育委員会は、私は、他県と異なって非常に丁寧にやってきたなというイメージは一部ではあるわけです。他県の高校改革を見てみますと、ある時突然、統廃合校が発表になる。さらに該当する校長も知らないうちに新聞発表になる。そのような意味では、今まで一生懸命にアンケート調査をやったり、地域懇談会や懇話会をやったりと、形だけは、私は、非常に長野県の教育委員会は丁寧に、県民の意見を聞いてきたと思います。

でも最終報告にどれだけ影響したかといえ、私は疑問を持っています。ただ、ここに至って焦っているのでしょうか。私は今回の学校名公表につきましては、第1回推進委員会で校数さえたたき台、さらに時間がたたないうちに校名もたたき台、たたき台、たたき台といいながら、県教委が上から上意下達で、結論を誘導していく、リードしていくというこの手法は、今までの、形だけは県民の意見を丁寧に聞いてきた手法と比べ、あまりにもこここのところ非常にあせり、結論を我々に誘導している。前回、第1回から始まった教育論議もみんな吹き飛んでしまう。もう議論する熱意も失われる。もうこの推進委員会の存在そのものも本当に失われる。そんな気がしております。強いて言えば私は、白紙に戻してスタートすべきだという具合に考えます。

さらに若干気になっているのは、先ほど資料が出ましたが、秘密裏に教育委員会が行われるというのが、私は非常に気になります。県民の財産である県立高校をなぜ秘密裏でなく、オープンにして議論してもいいのではないかと。この程度の内容の議論でしたら、十分な議論ではないのだから、秘密にしなくても良かったと思うほどです。やはり教育に関してはオープンにして、どのような議論がされたのか、高校名を出すのであったら、その議論をもって我々はスタートすべきであって、秘密裏に勝手に決めて、その校名をたたき台にというのは、私は納得いきません。

さらに、総合学科とか多部制・単位制というのが統廃合の手段として出てきているのですが、その中に関しては、先ほど小林委員は非常に勉強されておりまして、私も12通学区ごとに行われました地域懇談会で若干の発言をしたのですが、総合学科については、もう既に248の学校がつくられて10年を経過しているわけです。総合学科は非常にいい利

点もあると、私は 100 パーセント否定はしません。すなわち普通教育と職業教育を合わせて高等学校では施すんだという、学校教育法 41 条の考えからいっても私は全面否定はしませんが、この県教委の先ほどの資料にあるように、すべてがバラ色ではないわけです。

問題点も多く、さっき小林委員さんも言われましたけれども、全国の総合学科はすでに 2 分化されているんです。大学に進学特化している総合学科と、非常に言葉は悪いんですけどもカルチャーセンターに。カルチャーセンターという言葉はよくないんだけど、そのような総合学科に 2 分されているわけです。たまたま長野県の塩尻志学館高校、私はこれは、進学にかなりウエイトを置いており、うまくいっている学校ですけども、「あの学校と、あの学校が近いから総合学科で」というような問題ではありません。

今回は私のほうから、総合学科の全国の状況の資料をぜひ出したいと思います。総合学科に関しては、下伊那農業、それから長姫の農業とか商業、工業の専門性が地域に生かされて、期待されているんだったら、そこを総合学科に変えたら、私は下伊那地域の経済だとか産業にそれなりに影響があると思います。だからそこら辺は十分に検討しないと。

それから多部制・単位制なんですけれども、平成 2 年度ぐらいから生徒が減少していますが、定時制に通っている子は増加傾向にあるわけですね。私も 2 年前は定時制に勤務しておりました。定時制に勤務しておりますと、不登校の生徒は、家を出ることさえ大変なんです。家を出てやっと学校に来るんです。そのような困難な生徒を抱えているわけです。私は、そのような生徒を、2 年前にずっと見て教育してきたわけです。だから、安易に多部制・単位制高校を作るのではなく、もっと定時制の実状をしっかり把握してほしいと思います。

現に横浜では、定時制を統廃合して多部制・単位制にしたら、夜間定時制の生徒が非常にあふれてしまい、横浜の弁護士会は、これは人権違反だという声明まで出しているわけです。また子どもの権利条約委員会は、昨年 1 月に、58 項目の提言を日本政府に出しており、その 48 か 49 項目では、やはり定時制教育というものを高く評価して、高校から脱落した子どもたちに対して、柔軟な定時制教育というものを拡充していく必要があると、現に提言しているわけなんです。

私個人としては、もちろん財政的な面もありますが、現在の定時制を拡充しながら、その中に単位制とか多部制の部分の置いてもいいのではないかと。何も独立校でなくて良い、そのような考えを持っております。

部会の件ですけど、私はぜひ部会を設置していただきたいと思います。確かにどのようなことを諮問するか等々ありますけれども、メンバーを見ていただくと、先ほどどなたかの委員さんが発言されましたけれど、6 名が諏訪・岡谷地区で、ちょっとこれはあまりにもアンバランスだなというのも 1 つです。やはり県立高校は、地域の県民の財産、地域の財産、地域の人たちが土地もお金も労力も出してつくり上げた学校ですから、やはり教育の住民自治を確立する意味でも、ぜひ部会を設置して、県民の方々が全員高校改革プランの内容を理解しているわけではないんです。そこでいろいろな反対や、いろいろな運動が出てきても、それが迷惑ではないんです。その運動をとおして地域の高校をどうするのか議論することです。

だから私は 76 校という数値、学校名は、本来的には部会の議論の中から出てきて積み上げた結果 76 だ 80 になるなら、それは結構なんですけれども、上から単なる数合わせとい

う、そのような問題ではない。ぜひ部会を設置していただきたいなと思います。
しゃべることはいっぱいあるのですけれど、時間もありませんので。

（池上委員長）

よろしいですか。ありがとうございました。

委員長があまり、エゴを出して発言すると混乱すると思いますが、あえて私も小口委員と同じ会議に属しておりますので、少し私のほうで質問させてください。

1 つは財政の問題でございますけれど、先ほど吉江課長のほうから、「あと 10 数年たちましたら、また同じことをやっているかもしれない」このような発言があったと思いました。今の財政状況から考えて、今の教育費の捻出等は、今後も果たして継続ができるのだろうかと思います。少なくともそろそろ抑制されるであろうけれど、しかしながらこの学校数程度で統合が実現したとしても、果たしてもつものだろうかということについて、率直に疑問を持っております。この点について少し教えてください。

いかがでございましょうか。

（吉江高校教育課長）

委員長さん、私からで。

（池上委員長）

結構ですよ。

（吉江高校教育課長）

すいません。実は非常に難しいお話でございます。そう言いますのは、現在までの推移というのは資料でお示したような状況でございまして、これが今後どうなっていくかということは、正直な話、なかなか推測が難しいところでございます。またある意味、私も教育委員会のサイドで、今ご質問いただきました内容は極めて知事部局のほうの財政担当部門にかかわるお話かと思っておりますので、非常にそのような意味では難しいと思っております。

ただ、しかしながら、確実に 1 点申し上げられることがあるとしますと、資料の 13 をご覧いただきたいのですけれど、長野県の歳出予算の総計、総計が、今ここでご覧いただけますように、平成 5 年から平成 13 年までは 1 兆円を超えておりました。これは長野県の特異事情で、例えばの話が、いろいろな長野冬季オリンピック等を行った関係で、財収も上がったとかいろいろな、例えば国自体が基本的に、経済対策という名の下に、非常に地方にいろいろな事業をやれというようなお話もあって、それで膨らんできたという経過がございました。ただ税収自体は、ここにきて非常に伸び悩んでおるのが現状でございます。

それでさらに申し上げますと、平成の 14 年度以降がここにご覧いただけますように 9,000 億から 8,000 億。8,000 億もさらにどんどん下回っているという現況でございますので、これは基本的には、当然ながら県の歳出、歳入というのはイコールでございますから、望むだけの歳入を見込めなければ、当然ながら歳出を抑えざるを得ないというような状況の中から、推移しているものでございます。それを考えまして、今の日本の経済、非常に

膨大な借金が国にもあると、あるいは地方の借金も多いぞというような話を考えますと、これはなかなか爆発的な、今後、経済の発展が見込まれまして税収が上がれば別ですけども、そうでなければなかなかこれが、うんと大きな意味での好転につながるということは難しいのではないかと、こう思っております。

それでそうなった場合に、では教育費はどうなるかという、これはここにございますようにいろいろな政策的なご判断の中で、ほぼ同額近くの推移をしております、結果的に教育費の占める割合は、言ってしまいますと分母が小さくなっておりますから、ある程度以上の比率を維持しております。当然ながら経費自体もある程度維持していただいておりますので、そのままの状況でございますが、このまま推移するのは難しいのではないかと。当然ながら、これをこのままおくということは、例えば社会福祉にかかわる経費とかそのようなものを、ではどうするかというような議論にもなっていくのかなというようなものを、すいません門外漢ですので十分な説明はできませんが、ある意味で個人的な感覚として感じている次第でございます。

(池上委員長)

短い時間でまとめていただきましてありがとうございます。

それでは先ほど出てまいりました部会の問題でございますけれど、それに入る前に、今回の案でまいりますと、結果としては諏訪は0校の削減になっております。このような結果でございましたけれども。この内容について特に教育委員会から、どなたかご説明いただければありがたいと思います。

(吉江高校教育課長)

失礼いたしました。

前回の資料で、資料7というのをお示ししておりますので、もしよろしければご覧いただきたいと思います。

まず私どもは、基本的な考え方といたしまして、あえてこの場合申し上げますが、例えば平成31年を見て、今回の76校を決めているというわけではございません。といいますのは、平成31年の学級数というのは、この募集学級数の中でご覧いただきましたように375という数字になっています。その375を、ある程度以上の割り算で返しますと、恐らくもっと大きな数字になってしまうと思っております、基本的には今後の募集学級数の推移というのを、ある意味で帯でとらえています。

そのような意味では、平成2年を100とはしながら、平成2年を100としまして、平成31年はここにございますように55.4でございますので、極論を言いますと、平成2年をベースにすれば、89校×0.56でいいというようなお話にもなります。ですから当然ながらそのようなことは考えていないということをご理解いただいた上で申し上げますと、平成17とか18の諏訪の地域の数字が、ここで見ていただきますとお分かりのように、1995という数字です。これは生徒数でございますが、この数が、31年度1906あるいはその前の年が2073、2089ということで、第7通学区というのは減少をほとんどいたしません。いったん増えて若干減るというような事態でございます。

そのようなことを考えた場合に、旧第7通学区におきまして、なかなか学校数の統合と

というようなものは難しいだろうという判断をいたしました。それと加えまして、いわゆる第8通学区、第9通学区で申し上げますと、やはり生徒さんの、基本的に通学の利便性というようなものを考慮した上で、ある程度以上残さざるを得ない学校というものを視野に入れて、それぞれ検討した結果が、今お示ししたような数字であるということでご理解いただきたいと思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。

通しまして全体でご意見を、委員の皆さんのご発言を含めて、ご意見またはご質問等ありましたら、お出しいただきたいと思います。いかがでしょうか。

はい。

(岡庭委員)

これからの議論を含めて、その、推進委員会の今後の正確な課題というものを、私は明確にしておくべきではないかと、こう思っています。それは、先ほど長い意見も出しましたが、再編委員会の折にありましたが、私はここまで県教委が校名を出した会議においては、それはそれなりの覚悟があつて出したのであって、皆さんのご意見を聞いて変更しますよなどというものではないだろうと思います。それで、なぜ今年度中にやらなくてはならないかということは、多分その長野県財政の問題が根底にあると思うのですね。だから、このところをやはりもうちょっと県教委も明確に、やはり財政問題を明らかにするなら明らかにして、そしてやはり県民の意見を別の場所で議論をすべきではないのかと。県教委がやはりこれになるというかも、これはやはり行政のトップである知事が責任を持って、教育委員が、どれだけのやはり財政を投資できるか、出ないのかと。そういうことを考えるとどれだけ減らさなければならぬか。それで30人学級だってやらなくてはならない。高校をではどうしようかという、やはり責任が財政面でも明確に出して、議論をしていただくことではないかと思っているわけです。

ですから、この推進委員会で、今度出したのがたたき台だから、もういいとか悪いとか、ここを直したらどうかとか、数を減らしたらどうかという議論は、なかなか我々はしにくいし、そんな責任も私どもにはなかなか負いかねるというのがひとつでございます。

そのようなことから考えれば、出てきたことについて、さっきから言っているように、どのようにやはり県民の人たちが考えていくのかという議論を、積み上げていくべきかということになります。そうすると例えば、先ほどから言っているように、旧通学区の中でこの県教委から出された問題を、どのようにとらえて、どのようにその地域の高校教育を積み上げていくかという議論を、我々は聞いて、そしてこのような会に反映していくということが、ひとつ大事ではないかなと思います。

それともうひとつは、魅力ある高校づくり論と書いてありますけれども、実際に今まで、現在魅力がないとか、子どもにこういう問題が出てきたのは、どこに原因があるのかと。その議論なしにおいて、すぐ魅力ある学校づくりはどうしたらいいかという議論をしてみたところで、これは当然そんなに議論がかみ合っていくことはない。先ほど、丸茂さんや川島さんから話が出ましたように、根底にあるのは、やはり私は中学校における「輪切り」

だと思うんですね。

この問題に目を閉じておいて、魅力ある高校づくりはどうしたらいいかという議論をしてみても、私は解決できないのではないかという感想をずっともっているわけでして、そこらの議論を十分やはりやりながら、どうしたら魅力ある高校をつくっていくことができるのか、地域の中にどうつくっていくことができるのかという議論を、もしやるとするならば、そこに重点を置いてするべきではないかと、こう思っているところです。

（池上委員長）

ありがとうございました。今のご意見について、いかがでございましょうか。

（吉江高校教育課長）

基本的に高等学校の設置というのは、教育委員会に任されている事業でございますので、そのような意味では、今、岡庭委員さんがおっしゃられるような形で、果たして、いわゆる知事部局といいますか知事が、出てこられるほうがいいのかどうかというのは若干ございます。正直に申し上げて、今、教育委員会の独立性というようなこともいろいろ議論されている時代でございますので、その辺はちょっとどうかなという感じがしているところでございます。

ただ、もうひとつご理解いただきたいのは、先ほどもほかの委員さんから若干出ていましたが、ある意味、私どもがこの高校改革というものに着手したのは平成 15 年です。15、16 年度とまるまるかけて、ようやく見ていただける報告を出したわけなのですけれど、その報告を出すにあたって、いろいろな形で県民の皆さまのご意見をちょうだいしたのですが、十分な周知が図れなかったというような結果でございますが、確かに、ここへきて議論が出たということで、あたかも何か急に出されたというようなご意見もありますが、私どもにしてみれば、長い間の準備の末のものであるということはご理解いただきたいと思えます。

またさらに申し上げますと、このまま仮に私どもの計画通り、今考えているような通りに進んでいったとしまして、皆さま方からいただいた報告を受けて、教育委員会として、いわゆる実施計画を策定できたとして、その時期が 17 年度末、言ってしまいますと 18 年の 3 月です。その 18 年の 3 月にできたとして、現実的には統合の対象校というのが具体的に名前が出たとしましても、そこに入る生徒さんをどうするかという議論が出るのは、19 年の 4 月になります。その 19 年の 4 月に何らかの形をしたとしても、在校生の問題とかもありまして、あと数年は掛かってしまいます。

それを考えれば、やはりここへきて、ここまで承知してしたことについておしかりを受けると同時に、私ども県教委としても、ある程度早い時期にやることはやっていきたい。そういう意味で考えれば、皆さまに、確かにいろいろなご意見はあろうかと思えますけれども、いろいろなことをそれぞれの委員さん方が出し合っていただければ、ある程度以上の報告を精力的におまとめいただきたいと考えているのが、私どもの本心でございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。

ほかにご意見はございますか。

(小坂委員)

今回の校名の発表のみに限っていえば、非常にこれは該当する高校、生徒並びに地域というのは、私は大きな影響を受けると思うし、もうすでに来年の、例えば進学の中で、そのような高校へは、恐らく激減するのではないかなという意見すらあるわけですね。ですから高校名の発表というのは、やはり慎重にしてほしかった。私はそのように思っております。

特にこの第3区は、それぞれの地域の事情があるわけですね。下伊那地域は島根県と同じような広大な面積。上伊那はその中間であり、また諏訪は非常に人口も集約としておるし工場も多いと。そのようなことから、第3通学区をひとまとめにしてやることに、私は、ちょっとほかの学区と違う場所や地域性を持っているというように思っております。

ただ、岡庭委員さんのように学区ごとにと言いますと、もうすでに出てしまいましたからね。恐らく「諏訪はいいな」と、そのようなことになると思うのですね。例えば、じゃあ上伊那とか下伊那ということではやはりばらばらになってしまうので、その部会を設けてということについて、やはりもう少し議論を深めていかないと、私はそのような部会の設置はちょっと難しいかなというように思っております。

いずれにしても、高校名を出したということは、私はちょっと早すぎたと思います。これはまあ一般的に皆さんが感じていることではないのかなというように思っております。それはまあ、いずれは出さなければ収集がつかないでしょう。しかし十分な議論をした上でそういった結論を出して、あるいはその時点で、では学校は、高校教育課はどう考えているんです、というお達しの中で出してほしかったなというように思っております。以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

(小林委員)

私たちからの視点を明確にと思うのですが、その中で魅力ある高校づくりというのが何人かの方々の中から出てきているので、この視点を大事にして、これをもう少し明らかにするという方向へ、もっていくべきだと思います。ところで先ほど丸茂さんがおっしゃった、清陵、二葉は大丈夫だと、このような雰囲気があちこちにもっとあるのではないかなと思うんですよ。地域高校等の特定の高校だけが、いつつぶされるかともうドキドキしている。私はこれはおかしいと思うんですよ。私はどの学校も、本来、改革の対象にすべきだと思うんです。ということは、改革をするということは、再編するということは、すべての高校によりよい影響が出てこなければいけない。ある一部の学校だけがもう四苦八苦しているというのは、もう私は非常に問題だと思うんですよ。

ですから私は、本来は全部の高校を対象にすべきだったと思っておりますが、今はもうそ

のような選択は難しいと思いますので、それはもうやむを得ないと思います。けれどもせめて、先ほどから魅力ある学校づくりと言われているので、私も検討するための別冊の厚い学校要覧を見たんですが、これはほとんど魅力ある学校づくりの検討には役立ちません。

ぜひお願いしたいのは、大変だと思いますが少なくとも第3通学区の高校で、県教委としては「この学校はこういう点で努力している。このようなことをやっている」という形で結構ですので、一覧表にしてもらいたいです。そうすればそれについてもう少し、そのところはどうかしているかなというように、私もしっかり理解をして、この学校はここで本当に努力していると、この学校は一体どうしているのか分からない等の分析を積み重ねていくと、先ほどから言っている単なるイメージの魅力ある学校づくりではなく、具体的にどのようなことをやっていることが魅力ある学校づくりなのかかわかってくると思います。その中で、では再編をどうしていくかという話をしていかないと、さっき言った、ある一部の地域だけがもうカッカカッカして非常に悲しい思いをする。大部分の学校は「我が校は大丈夫だ」という。これはもうぜひ避けてほしいので、次回もしできたら、県教委で、3通の各学校の、こんなことをやっているんだという、本当に部分的で結構ですので、できたらそのような資料を出してほしいと思います。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

改革、魅力ある高校にするためにも、何かひとつである内容ですね。

(吉江高校教育課長)

今、小林委員さんからもご指摘いただきましたように、基本的に89校すべてを見直すというスタンスに、私どもも立っております。たまたま結果として、今お話がほかの委員さんからも出たような状態になっているというのは、決していいとは思っていませんし、例えばほかの通学区の場合で、例で申し上げますと、何々通学区において、全体的にどのような学校が望ましいかというような意味合いで、いわゆる魅力づくりを考えたらどうかというような議論をされているところもございます。ですからそのような意味では、私どももぜひ、名前が出る、出ないにかかわらず、今ある県立高校を含めまして、この3区を当然ながら含めまして、ぜひ検討いただきたいと思いますので、先ほどいただきましたような資料を、どの程度ご満足いただけるものになるかは別として、次回までにご用意したいと思います。

よろしくお願いいたします。

(池上委員長)

ありがとうございました。どうぞ。

(熊谷委員)

その用意する資料ですけれども、県教委でつくるのではなくて、ぜひできれば各学校自身が考えて、「これとこれを頑張っているぞ」というのを、可能ならば用意していただければいいと思います。県教委でつくってしまうと、どうしても一夜漬けになってしまう気がするので、「おれのところはがんばっているぞ」というのをやはり各学校で主張したいかなと思うので、そういうのにもぜひ、この委員会に提出していただければうれしいなという気がしますので、よろしくお願いいたします。

(篠原教育幹)

まさにその通りに調査を実施して、そしてそれをまとめたいと、このように思います。その結果をご覧いただければよろしいわけですが、ほとんどすべての学校、ほとんどという言い方でなくてすべての学校で、やはりこの間、昭和の終わりから平成に掛けて、「個性ある高校づくり」という名前の下にさまざまな発想をしてきております。例えば進学校と呼ばれているところが、果たして安閑とここまできているかという、決してそうではない。次回ご覧いただければよく分かるだろうというように思っております。

それから、もう1点でございますけれども、今の議論と関連しますけれども、「統合」という表現を使っております。統合ということは、例えばA校とB校が統合するということは、これは校地をここにします。学校の土地をここにするというのが、表現の中でさせていただいておりますけれども、A校とB校を統合するということは、例えばA校の特色だけが残るとかB校の特色だけが残るとか、あるいはA校とB校を足して2で割ったものの特色が残るとか、そのようなことではないんだということでありまして。つまりA校とB校を統合し、もろもろ、例えば施設設備の状況、あるいは地域的な資源というものを考えた上で、どのような新しい学校が可能なのか。そういったご議論を、ぜひこの場でもお願いしたい。そうしますと結局、そのような学校がある場所にできるということになりますと、その周辺にある高校は、ではいかなる学校にするべきかということが、実際に議論の対象になってくると、このように思います。今、課長が言われた、いわゆるすべての高校が一緒であるというのは、そういった意味でございます。

よろしくお願いいたします。

(池上委員長)

ありがとうございました。

(小口委員)

先ほどから、諏訪地域はと言う話がありましたけれども、やはり県の姿勢をお伺いしましたので、是非そのようなことはやっていただきたいと思います。

私は思うのに、先ほどはジョイント校は経済効果が少ないのではないかという話をしましたけれども、例えば諏訪地域をみても、先ほど二葉、清陵という話がございましたが、昔と比べるとだいぶ二葉、清陵の意味合いが変わってきていると思います。その様な意味ではジョイント校にとりか、あるいは岡谷東と岡谷南も同様に考えられるでしょうし、やはりきちんと検討し、しかし、やはりやめた方がよいというのであれば、それは止めれば良

いと思います。

それから、部会設置ですけれども、やる方法はいつ迄を期限とするか。いつ迄に決めるか。それが出来れば部会を設置するということは、良いんではないかと。しかし、いつまでも部会でまとまらないから検討案をボツにするというのであれば、これは問題であるので、やる意味がないんですけれども、やはり最終的な時期を区切りながら部会をやって、それでやっていってまとめていくと。

このようなことがもし可能であれば、いいのではないかと私は思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。

どうぞ。

(藤本委員)

先ほどから、「魅力、魅力」という言葉が飛び交っているんですけれども、今、高校の現場ではもう本当にこの高校改革プランを意識して、「魅力」で振り回されています。私は、それを出して、魅力がないから、何もやらないから駄目ではなく、地道に、生徒1人1人に、放課後補習して分数の計算を教えている。そのようなこともあるので、魅力をどんどん出してそれを評価し、何もやっていないと言われてもそれでは困る。私は、通学区の拡大と、それから前期選抜入試、それと今回の高校改革、これらが三位一体で、魅力のあぶり出しになっているのですよ。

それで、学校現場で常に出てくるのが、高校改革であり、マスコミに載るようなことをしなきゃ困るんだよとか、当然やったことは、新聞社にも対応しています。日々の落ち着いた教育実践ができない状況になっているわけです。

荒川区で市民アンケートを採って、これは雑誌世界の6月号なんですけれども、このような記事がありましたね。「必死に必死に魅力づくりで、子どもを増やそう、生徒を増やそうと努力したけれども、集まるべき学校に集まり、集まらない学校には結局来なかった」。これは荒川区のアンケートです。これが、岡庭委員さんが、輪切りというのを先ほど言われておられました。そこにもものすごい大きな、まず原因があるわけです。

だから私は各学校から出していただくのは、それはもう結構ですけれども、もっと地道に、放課後、できない子どもを一生懸命教えている、そのようなことがはじかれてしまうことを私は、非常に心配しております。

(池上委員長)

ありがとうございました。

どうぞ。

(小林委員)

藤本先生のおっしゃることを、もうちょっと言います。私がさっき言ったのは、何ていうか、きれいごとの魅力ある学校という、例えばコース制にしました、専門学科をつくりましてこのようなことをやっているとか、まあそれもそれでいいんですが、もっと今言っ

たように、本当にうちの学校では心配な生徒がたくさんいるけれども、このようなことをやっているというような、そのようなことも含めた上でないとまずいかなと。

ここで、検討委員会で一番問題にしているひとつに、学力と無気力、それから非行問題と挙がっていますよね。いわゆるさっき言った点数の高い学校の子と、それからいわゆる偏差の低い学校の子の、対応の仕方は全然違うと思うんですよ。だからそれを、何かこの学校は非常に比較的平和だからいいとか、そのような評価をしては絶対いけないと。ものすごく大変な子どもたちがいる中で、何をなさっているかということを私らは一番知りたい。

そのような資料をぜひ、うわさはいろいろ私も聞いているのですが、あくまでもうわさですので、できればそのようなものを含めて意味で。このような意味では熊谷さんがおっしゃるような、各校が独自にそのような資料を出していただければ、大いに結構かなと思います。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。今の話はいかがですか。

(吉江高校教育課長)

ある意味で、今たまたま藤本委員さんからも話がありました、小林委員さんからもお話があったんですが、例えばひとつの例としまして、いわゆるコース制とかそのような表現ではなくて、ある学校において、推薦入学とかそのようなことのために、一生懸命先生が8時、9時までその指導をしているというような事例が、その学校の、ある意味で大きな特色みたいな形で、その地元では語られているということもあります。そのようなことも反映できるような内容で、それぞれ個々の学校の内容につきましてはお示ししてまいりたいと考えているので、よろしくお願いします。

(岡庭委員)

非常に単純な質問なんですけれど、その輪切りの問題で、「私の学校は何点以上の子どもを入学させます」とか「何点以下の子どもさんを入学させません」とかというのは、これは情報公開をされているんですかね。だからそここのところはやはり、私は高等学校教育のいろいろな問題の根底にあるのは、私は見ていまして、ここにあるなというのはひとつあるんですよ。それは中学校の教育を含めて全体で議論しなくてはいけない問題で、誰もがやはり触れたがらない問題なのです。

ある学校が、本当に生徒指導だけのために2/3の時間を用意している学校がある。ある学校も、進学のための授業、教育、要するにカリキュラムがあるために一生懸命やっている学校がある。これは、歴然たる高校の魅力ということを考えれば、違ってくるわけですよ。そこら辺も含めて、多部制・単位制といったって、なぜ子どもたちが学校へ行きたくなくなっているのかということですよ。昔は本当に一生懸命、お金がなくて勉強したい子どもが定時制に行ったわけですよ。今は「居場所づくり」というということが、歴然と語られるというところに、何かこの高校教育の問題があるなという気もするんです。ここ

の点についても結論を出せなどと言いませんけれども、ある程度やはり、そこら辺も情報公開しながら、やはり子どもたちが選択していくし、親が選択していくということが、本当に大事ではないかというような気もするんですけれども。まあ、非常に無理だなということはよく分かりながら、ここのところが一番私は最大の問題ではないかこう思っているんですけれど。

(池上委員長)

ありがとうございました。

(篠原教育幹)

ただ今の岡庭委員からのお話ですけれども、例えば前期後期試験になりまして、前期、これはそれまでの推薦と違いまして自己推薦、自分自身で各学校の掲げる目標、それから各学校の教育内容、そういったものを見ながら、もちろんこれは担任の先生やあるいは保護者、自分の親と相談しながらということなんですけれども、決定をしていく、受験しようと、あるいはしないというもちろん選択もあるわけなんですけれども、していく。その際に高校としてはできるかという、具体的にこの高校がこのようなことを目標としている。それから、この高校が受験の際にはこのような、例えば基礎学力が英語・数学であるとか、あるいは点数はもちろん、どれぐらいの点数を取れることというのは、前期試験ですから、選抜ですから、学力検査はございません。

あるいは、このくらいの表現までしている学校もございます。国語と英語で、あるいは数学で、「1」がないことが望ましいというような表現。これは、2年目に、初年度の反省の上に立って、県民からさまざまなご意見をいただきました。中学校からもちろんいただきました。いただく中で、そのようなもっと細かく、もっと具体的にというような要望がありまして、私どもとしてはそのようなことを研究していくと、間もなく時期的にはそういった段階に入ってまいります。

それから、昨日の推進委員会の中で、保護者の委員の皆さんからこのようなお話も出ました。高等学校を選ぶときに、保護者としては、もちろんすべての保護者というわけにはならないと思いますが、その委員さんは、「学校が落ち着いていること」これを選択のひとつの大きな意義にするというように言っておられました。生徒指導等々、非常に苦しい中で、先生方の努力によって改善が進み、そして落ち着いた学校になっているというのは、実は全県下、かなりの数にのぼっていると、そのような学校がございます。

それからさらに、確かな学力を付けてくれる学校。このような声もございます。ですから、単なるいい学校、悪い学校というような、非常に漠然とした思いの中で、生徒たちも選ぶという、そのような生徒たちももちろんいるでしょうけれど、しかしやはり願いは、親御さんもそうですけれども、何か自分の子どもが少しでも伸び伸びと、さらに自分の今持っている力が伸ばせるように、これは総合学科にしてもそうだと思いますけれども、そんな内容を持っているということが感じとることができるわけです。

以上でございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。
どうぞ。

(関 委員)

先ほど、岡庭委員さんからご指摘がありました輪切りの問題ですが、確かに高等学校には輪切りが存在することは事実です。その各学校に入学しております生徒集団それぞれに応じて、最終的には希望する進路の実現を目指して、各校が努力しているわけです。今、各校の魅力について資料を出せというお話ではございますが、それぞれ各学校の課題と生徒集団が違いますので、それを同じ平面に並べて、こっちの方が魅力がある、こっちは駄目だということにすることは、非常に難しいと思いますしすべきではないというように思っております。資料を出せとおっしゃるのでしたら、各校が時間にも制限がありますので、そんなに膨大なものは出せませんけれども、それぞれの魅力あるところを資料として提供はできると思います。見ていただければ、各校でそれぞれ、見えない部分で非常に努力しているというところは、お分かりいただけるかと思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。

まだ、当然のことですが議論は尽きませんが、時間がまいりましたので急ぎます。今日のところは財政問題を強く認識をしていただいて、次回から、先ほどから議論をしてまいりました魅力ある学校にという方向に、議論を展開してまいりたいと、このように思います。その中で議論が深まっていて、部会が必要だというような判断が出てまいるとすれば、それはまたそれに対応を検討したいという結論でいきたいと思います。そのような形で今日は、とどめたいと思います。なお、次回の日程につきまして、事務局より案はございましたら。

(野村主幹教育支援主事)

次回の日程につきましてでありますけれども、委員の皆さんのご都合をお聞きしながらやっているところでございます。7月12日ごろがめどかなという感じがいたしておりますが、まだ会場も取れておりませんので、議長ともご相談の上、案内を差し上げたいと思っておりますので、よろしくお願いいたしたいと思います。

(池上委員長)

大変熱心にご討議いただきましてありがとうございました。大変難題を持っているわけではございますが、せっかく機会ですので、少しでも検討が進むようにいたしたいと思えます。本日は大変ありがとうございました。